平成31年1月17日(木)
宮崎第一高等学校

宮崎日日新聞掲載記事　文理科卒業生：三上かつらさん(鳥類研究者)・普通科卒業生：西村拳さん(空手選手)

卒業生2名の記事が新聞に掲載されました。

©MIYAZAKI DAIICHI
Unauthorized reproduction prohibited

2019
January
17

本校卒業生の**鳥類研究者・三上かつらさん**(文理科卒、九州大学理学部生物学科卒。現在はNPO法人バードリサーチ研究員と日本野鳥の会野外鳥類学論文集「Strix」副編集長)と、**空手選手・西村拳**さん(普通科卒、近畿大学経営学部経営学科卒。現在は㈱チャンプ所属)が1月13日(日)と1月16日(水)の宮崎日日新聞に掲載されました。

卒業生の近況報告を聞けることは、教職員にとって本当に嬉しい出来事です。これからも卒業生の近況を楽しみにしています。

新聞掲載

野鳥通して古里知ろう

宮崎市出身の研究者・三上さん

知られざる生態 共著で紹介

「スズメはシジュウカラのまねをする」「ムクドリの群れにはルールがある」。宮崎市出身で鳥類研究者の三上かつらさん(43)＝北海道七飯町＝は、野鳥の生態研究や執筆活動に取り組んでいる。昨年は鳥の知られざる生態を解説した、子どもから大人までが楽しく学べる書籍を出版。三上さんは「人間の生活に身近な鳥の生態を学ぶことは古里の理解につながる」と研究の魅力を語っている。

同市の宮崎第一高を卒業後、九州大理学部生物学科に進学。在学中、スプーン状のくちばしを持つヘラシギを観察し、その動きに興味を持ったことがきっかけで研究にのめり込んだ。同大学の研究員などを経て、同じ鳥類研究者で夫の修さん(44)が北海道教育大に勤務するのに合わせて2014年に北海道へ移住。現在はNPO法人バードリサーチ(東京都)の研究員と、日本野鳥の会(同)の論文集「ストリクス」の副編集長を務める。

他の鳥類学者ら2人と昨年執筆した書籍「トリノトリビア　鳥類学者がこっそり教える野鳥のひみつ」(西東社)では、全83本のエピソードのうち26本を担当した。

幅広い世代に読んでもらおうと、「面白い」を基準にテーマを厳選し、自身の研究や一般市民の研究論文を参考に「汚れたスズメは砂風呂に入る」「カラスの鳴き声は個体差がある」などの生態を紹介。イラストやユーモアあふれる文章を織り交ぜて解説する内容が評判となり、ネット通販大手・アマゾンの鳥類学部門で販売数などを基にした「売れ筋1位」となった。

九大大学院時代に知り合い、01年に結婚した北海道教育大准教授の修さんとは原稿を夫婦で互いに校正することもあり、修さんは「日常会話の大半が文章表現の話題になることもある」と笑う。

かつらさんが本県の豊かな自然を再確認したのは、「研究者になってから」。年に数回帰省するが、その際、実家に毎年飛来する鳥の存在を初めて知ることもあったという。それだけに子どもたちが自然に触れる機会が少なくなった環境を危惧しており、「宮崎では生物という教材が常に身近にあり、ちょっと注意して観察すれば古里に関心を持つきっかけになる」と話している。
（坂元穂高）

昨年末に帰省した際、著書を手に「地域を学ぶには鳥は最適な教材」と語った三上かつらさん（左）と夫の修さん＝宮崎市・宮日会館（押川真基撮影）

↑宮崎日日新聞(1月13日掲載/三上かつらさん)

ニッポン スポーツ人の肖像 (随時掲載)

東京五輪の頂点使命

空手男子組手 西村拳

尊敬している人 真っ向勝負で倒したい

空手が初めて行われる2020年東京五輪で頂点に立つことは、この時代の空手家として使命だと自負している。男子組手75キロ級で23歳の西村拳(チャンプ＝宮崎第一高出)は昨年11月の世界選手権(マドリード)で個人、団体で3位。五輪代表レースのトップを疾走する。「世界最高峰の五輪という舞台で金メダルを取る」。固い決意を胸に抱き、五輪前年のシーズンを迎える。

▽果敢に攻める

日本人には珍しく、果敢に攻める闘い方が特徴だ。世界選手権の3位決定戦。上段蹴りや相手を倒しての突きなど一挙に3点が入る大技を3度決め、ロシア選手に11－1と圧勝した。頂点には届かなかったが、初の世界選手権個人戦で潜在能力の高さを示した。

攻撃的なスタイルは宮崎第一高、近大という屈指の強豪校で磨かれた。「強い先輩がたくさんいた。そういう選手とやる上で、自分が何に秀でているかを考えるとスピードやリーチだった」。身長は175センチ。75キロ級で高い部類に入る180センチだ。すらりと長い手足を生かした突きや蹴りに活路を見いだし、世界のトップレベルに駆け上がった。

中学時代から西村を知る日本代表の今井謙一コーチは「思っていたより(成長)速度が速い」と舌を巻く。「ちょうど東京五輪が、彼にはぴったりになる。今からもっと強くなる」と大舞台での活躍に太鼓判を押した。

▽父は元世界王者

物心がついたときから空手に親しんだ。1980年世界選手権を制した父、誠司さんが指導する道場に一緒に通い「いつ空手を始めたかも覚えていない」と笑う。幼い頃は、きゃしゃな体つきで内気な性格。「当たり合うのが怖くて大嫌いだった。(道場で)逃げ回っていた」。真剣に稽古をしたことはなかった。

打ち込んだのは中学入学後。小学校から通っていた学習塾が嫌で、誠司さんに相談すると「塾のことは母さんに言ってやる。でも、何もしないのは駄目だ。空手をやれ」と言われ、「やる」と即答。それからは毎日、父の道場で鍛えた。

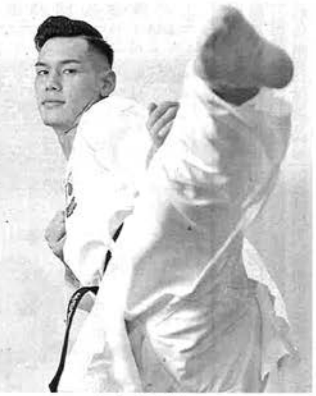
身長が伸びるとともに頭角を現し、高校は「九州で一番強く、日本一の練習量と言われている」ことから、故郷の福岡県を離れて本県に留学。2年で全国高校総体を制し、全国的に名を知られるようになった。当時を知る近大の吉田康弘監督は「線は細かったが、運動能力は高かった。日本代表には当然なって、世界でどこまで闘えるかというレベルの選手になると思った」と述懐する。

▽〝伝説〟に憧れて

中学時代から憧れ続ける選手がいる。空手界のスーパースター、ラファエル・アガイエフ(アゼルバイジャン)だ。今は同じ75キロ級を主戦場とし、08年世界選手権では70キロ級と同時に無差別級を制覇。〝生ける伝説〟と呼ばれている。

10歳年上で33歳のアガイエフに初挑戦したのは、16年9月のプレミアリーグ・ハンブルク大会。5－0で撃破し、これまで個人戦では5勝1敗と勝ち越している。だが現在も世界ランキング1位に君臨する強豪を「今でも憧れている」と熱いまなざしで見つめる。

そんなアガイエフとは、ともに3位だった世界選手権の会場で約束したことがある。東京五輪決勝での再戦だ。「尊敬している人でもあるので、真っ向勝負で倒したい。五輪決勝の舞台で超えてこそ、本当にトップを取れたと言えると思う」。夢の瞬間を目指し、己を鍛え続ける。



空手の西村拳

西村拳・略年譜

1995年12月31日	▶福岡市生まれ
2011年4月(15歳)	▶宮崎第一高に入学
12年8月(16歳)	▶2年で全国高校総体の個人組手優勝
14年4月(18歳)	▶近畿大に入学
8月	▶プレミアリーグ初出場の沖縄大会で3位
16年9月(20歳)	▶プレミアリーグ・ハンブルク大会で初優勝
10月	▶世界選手権団体で銀メダル
18年11月(22歳)	▶世界選手権個人、団体で銅メダル

宮崎日日新聞(1月16日掲載/西村拳さん)→